

塩丸

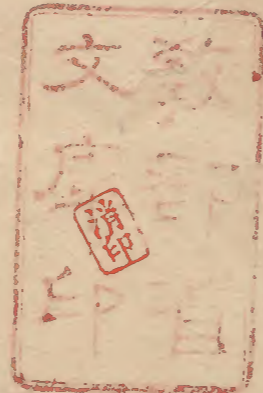
六十二

大 政 官 文 庫			
	一	和	
	一	書	
	四		
	九		
	七		
六	一		
五	冊		
冊	函		
架	號		

內 閣 文 庫			
	一	和	
	一	書	
	四		
	九		
	七		
二	一		
一	函		
二	冊		
二	架		

內 閣 文 庫		
番 號	和 11497	
冊 數	65 (62)	
函 號	211	302

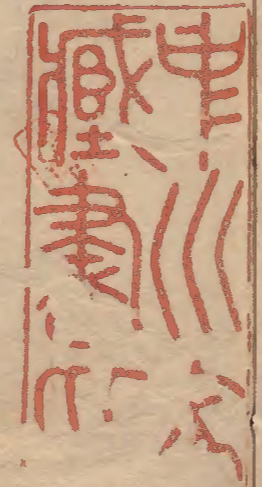




内一二七九〇號

六十二

熱田正覺寺畧縁記



尾張國愛知郡千竈庄熱田今路龜止山

正覺講寺代後花園院の御宇永享

年中融傳永乘上人の用基に

勅願乃吳場淨土西山沘檀林の隨

抑上人當國部曰祐福寺第四葉八主

徳行兼備を備ひ特に誦明和

乃生てすとく音て越れ白山と日

乃際推現より除祀三聖の繪像を寺に
 うめひまを像人か祐福にあり又當所
 勢田大伸言とて敬しとて東枝所鈴の
 一旦系詣のゆき東枝所鈴の
 に渟々鳴海深蒼海の渟々ふに信々神
 徳の深廣ありとて思ひやり給ひ一人
 の神人忽然とて来り人に
 名を當宮此神職栗田真人
 城太夫

まのにくけり上人法縁に當言に詣り誦經
 念仏し法未と奉りてありとて
 ひ侍まハハの地とて上人一
 新ハ一寺と建立し眞法夜生を
 語りての徳きぬ上人奇
 試に此地に一夜をあり住止の
 とて護中の中に在りて
 澄し念仏しなまひ

るく對面しるふに此の初皮にあむ之
あやしくおぼしきもの越成語り給ひりたふ人
中もつは是神主の所他ありんか地は此取取は傳
ら福も地まに乞請まり其と上人と伴ひしん
地まふらうく語りぬ地まも誠は明神は示現
おんを信後し使此地と上人にあせきあせぬ
上人よりこひく書く諸人に昔給ふに遠近馳集
土本やまこひ資紙と抱く仏殿僧舎不日に

經營も上人仏殿の為此方に井と掘志あり給ふ
に其龜の足ありとらんく上人奇しくわく
く起は是四足の長壽の徳あり給ふ此蓬萊
鶴の東ふれを美に正法久住の瑞おがらんと
使龜足山と号しとあひぬ此神主とゆる草
劍の支殿に天聽にまし川勅願の論旨と揚
ひ又今既とらんく海地比こそと圖画しとあ

當寺に納りしとせまふ又永禄五年申正親町院曾

く先皇此敷^{カク}と^{カク}崇^{カク}ませ玉ひ皇孫^{カク}と勅^{カク}の
倫^{カク}旨^{カク}と第^{カク}七^{カク}世^{カク}の住^{カク}大^{カク}融^{カク}仙^{カク}也^{カク}上人^{カク}に經^{カク}ひし
後^{カク}慶^{カク}長^{カク}六^{カク}年^{カク}の春^{カク}民^{カク}家^{カク}災^{カク}あり^{カク}條^{カク}燄^{カク}に^{カク}加^{カク}り
殿^{カク}堂^{カク}と^{カク}く^{カク}灰^{カク}燼^{カク}と^{カク}り^{カク}ぬ^{カク}さ^{カク}き^{カク}も^{カク}震^{カク}筆^{カク}此
繪^{カク}像^{カク}乃^{カク}ひ^{カク}淨^{カク}土^{カク}曼^{カク}荼^{カク}羅^{カク}像^{カク}涅^{カク}槃^{カク}像^{カク}惠^{カク}心^{カク}僧^{カク}の
親^{カク}筆^{カク}仏^{カク}菩^{カク}薩^{カク}束^{カク}迎^{カク}ノ像^{カク}寺^{カク}楹^{カク}と^{カク}の^{カク}ま^{カク}と^{カク}今^{カク}り
ナ^{カク}し^{カク}と^{カク}藏^{カク}む

一當寺本尊ハ寛永年中第十五世在道教諫上

人乃と此近村山邊の々に青山太郎乃由つ吉久と
いふ者當田松本の城主佐久間大膳亮平勝之
宗^{カク}む^{カク}し^{カク}下^{カク}の^{カク}弥^{カク}陀^{カク}の^{カク}立^{カク}像^{カク}と^{カク}傳^{カク}持^{カク}せ^{カク}り^{カク}去^{カク}り^{カク}に
寛永十一年七月十五日の夜そ像夢中に告給
く熱田比居民海夜のとれ至すり速尔正覺
寺へうつりてと吉久さきく強うにとれ上人
に^{カク}啟^{カク}し^{カク}り^{カク}し^{カク}て^{カク}上人^{カク}慈^{カク}歎^{カク}に^{カク}と^{カク}え^{カク}ん^{カク}心^{カク}く^{カク}流^{カク}
僧^{カク}と^{カク}り^{カク}彼^{カク}家^{カク}に^{カク}往^{カク}し^{カク}め^{カク}近^{カク}り^{カク}て^{カク}仏^{カク}殿^{カク}り

安を志好ひりりまうりる麻光年を経て起
 意シサノ目と累イサノく盛イサノるれハ其告イサノの今にむか
 のさる夏法人音く知りて

一慶長十七年第十二世の住澤乃上人殿堂を
 中興せり今の仏洞寛文三年イサノ第十九世曲八空
 二人あゝふ本堂を造立し檀林コウリクと興隆せり
 昔日ソノカより上棟シヤウトルれ日イサノのさるや白鶴ハクニ空中カウニヤウに翱翔
 乃瑞あり諸人イサノを神イサノの示現と志願イサノ也載イサノ

本縁起に詳ツヒヒラカり

現住正覺沙門黙念敬識

時享保十歳次乙巳秋八月

乙巳八月寺に宝物をとりて諸人におもせ
 らしむ所の板の震筆に弥陀三聖金字、御讚、類
 の仏を容くもの他古畫乃仏菩薩の像経世乃
 筆りておかし東郊宮中慶長の宗論四度宗論記、筆、等、イサノ
 乃と池上等六ヶ寺に住持シシヨ連署を捧り澄せ

一通 高野の頼慶因梨乃記 夏一巻あり 其時身延

山以下ノ連判言師本國寺廿一ヶ寺の連名の澄状に増上寺(おさめ)をいひ此一通は沢々文に綿て長く古に紛む

くく讀日蓮、造言此鬼を諷り且ッ宗論にま

あゝ刑せしむとてほろり嘯と日蓮黨

是をこして大方よ後立とて宗論のあつて家

宗の議しつゝふかろあやさむとてさこそ物言

ん是こそふかむとておろし波名舎のり

ふれとて此談我に及ぼもろく宗論を誦讀

せしめ法もさうり嗚呼、の宗徒いして

是れと追愚痴邪執りるをこそれゆる在俗の

男女ふふりておろし^{三イ}咄恚にま

ぬすめ不便く今年東初初ぬの蓮徒あり

て獄にほろし京師秘傳の條黨ありて詰問

におふとらん

○資暇録凡爐子^ロといつう周繞^{ユウ}志く凡と通じら

かいつとこと一説に秋像焔炉子と名けり理亦

迎ト云 異邦むじいひき茶の湯云

家風炉毎コト用ひく湯と煮茶云

良も久茂云 老の如く

○或人身体のゆひハその文章と如く老弱

〜と云そ字如何と云予曰

蠡海録宗在選に 人之心心抓カ而不ス痒人之

足心アテウラ抓レ之痒者何也蓋人心通ス心心心心

属シ火喜カ動カ故不レ痒人 足心通ス賢心賢心

属ス水喜カ静カ故痒云 是と云く如く下

痒云の字

○桂苑叢談唐馮翊 所撰 曰越僧灵微蓮花漏を

序山にゆりて割釘葉の器カケテ狀蓮花の

盆氷乃上に夜夜の孔キ水を漏カ半ハる孔ハ沈ミ

昼夜ハ十二度ハ沈ミ交ハる雲陰月黒たがふ

あつと云

東遠禅師山中漏る水と云く

割やうといふハ不_レ満_ニとと漏_レ筈にやう

と是_レと造_ル六時_ノ心_ノの時刻_ヲさ_レめ_ル

ま_レし_テとあり

○中華_ノ古今_ノ注_ニ城_ガ盛_セ所以_ニ盛_ニ受_ル人物_ニ也

城_ハシロ_ト訓_ヤハ韓_ノ人_ノ方_ノ語_カる_ル

先_キに是_レを記_ス

○青龍_ノ幡_ノ朱雀_ノ幡_ノ玄武_ノ幡_ノ白虎_ノ幡_ノ黃龍_ノ

幡_ハ魏_ノの朝_{ヨリ}起_ル古今注是_レを信_ニ幡_ト云

符_ハ信_ノ之_ノ四方_及ひ_レ内_ノの郡_國是_レを_レ用_フと云本_ニ神_ノ幡_ノよ_レわ_レん

家_ノ國_ノ 皇帝_ノ 即位_ノの_レ所_ノ 庭_ノよ_レま_レる_ル

設_クと_スハ_レ四_ノ外_ノ末_ノ朝_ノの_レ儀_ノ我_レ尾_ノ府

東_ノ照_ノ宮_ノ 帝_ノ祭_ル此_レ日_ニ此_レ五_ノ幡_ニ勾_ノ陳_ノ幡_ヲ加

え_レと_ク六_ノ幡_ヲ立_テ勾_ノ陳_ハ星_ノノ_名童_ノと_圖を_出すと_スる_ル

古今_ノ神_ノ輿_ノ出_ルの_レ儀_ニ此_レ六_ノ幡_とと_スと_スる_ル

三_ノ本_ノの_レ神_ノ輿_ニ二_ノ幡_ヲ先_ニ立_テめ_ルら_レし_ハ

その_レ合_も好_くと_スる_ル同_くハ_レ六_ノ幡_とと_ス

新神輿の先きにる魚陣ツラにて行くと云

東照宮の所祭ハ天子の礼を官准ありし
少くは諸社の所祭に在るもよみありし

○古今注に唐の武徳貞觀のころ宮人馬に強ノリ

幕ハキ四離イメクキヌと云ふは全身を障蔽カリスも永徹キ乃

後ハミ子帷帽イハラウと云ふは頭や後ウスホウシを蔽カせり後世ハ

繪クイハク白巾エギヌと云ふは身ミを蔽カふ等ナのころを

いふは是家国婦人カと云ふは被衣カツキと一般イの

處トコロにおりえ侍り

但しつれは全くのひびきを削りて

上ミツ古質素ツ此と云婦人メ出デに輿車ウなると

かろし時々の被衣キレの布帷カクヒと云うて取トり

時々の被衣キレを蔽カひしるはあまらるゝ氣キの

故コト更マと云ふおはるといふは氣キの

聞クこころふ記キを識者シ是を考カへ

同書に女人披帛ヒ 同之中ヨリ
有と云是も又マらるゝるに

あ

。南唐近事に奇怪なる事あり記せり鬼あり

江都の大廳云云
我國も又るく此の事

。開元天宝遺事に長安の士女其髪にありて

ありて公花に過りて席をとりて身を藉く

紅裙をとりて遮に相掉掛く事ありて

香逸りのものありて云々

。あま京師東郊より日見人の客著逸

事ありていふに近所小袖幕かといひて

婦人綉衣を掛りて少なりてをみたり和利

吉野山の穠花用盛のといふ京雜波人遠遊

乃真他国にありて所也

則天の朝政姦幸によりて時の人足と小兒

市此とつり是香味をもえりてを肥大なる

ものをもえりてたふりて家則も俚俗
此の大なるを悦

。西使記ハ元乃劉郁々不記之ありて元主西征

乃其を筆せり
旭烈 其の中法国と石迷の

俗をふく親遊氏の衣鉢と傳ふる者ハ其人
儀状是^{イニ}古^{イニ}之^{イニ}世^{イニ}繪^{イニ}と^{イニ}ころ乃^{イニ}達^{イニ}テの像乃
と^{イニ}草酒と不^{イニ}茹^{イニ}日^{イニ}に^{イニ}稗^{イニ}一^{イニ}合^{イニ}を^{イニ}嘖^{イニ}ふ所
談^{イニ}皆^{イニ}仏^{イニ}法^{イニ}禪^{イニ}定^{イニ}を^{イニ}嘗^{イニ}り^{イニ}り^{イニ}竺^{イニ}土^{イニ}ハ^{イニ}仏^{イニ}跡^{イニ}を^{イニ}其^{イニ}ハ
その餘音流凡の海もあま^{イニ}一^{イニ}是^{イニ}と^{イニ}漢^{イニ}子
傳^{イニ}く^{イニ}方^{イニ}語^{イニ}を^{イニ}擇^{イニ}一^{イニ}再^{イニ}傳^{イニ}一^{イニ}く^{イニ}日^{イニ}本^{イニ}に^{イニ}至^{イニ}り^{イニ}又
傳^{イニ}訓^{イニ}を^{イニ}以^{イニ}て^{イニ}是^{イニ}を^{イニ}説^{イニ}ふ^{イニ}く^{イニ}遠^{イニ}く^{イニ}派^{イニ}真^{イニ}に
近^{イニ}く^{イニ}も^{イニ}多^{イニ}う^{イニ}ん^{イニ}但^{イニ}し^{イニ}も^{イニ}正^{イニ}字^{イニ}と^{イニ}傳^{イニ}へ

て乃を以てするの人の豈に三國の義ありんや但し教
則戒律あり僧の戒は大方白俗と傳とる^{イニ}一^{イニ}も
心^{イニ}そ^{イニ}約^{イニ}も^{イニ}又^{イニ}僧^{イニ}家^{イニ}と^{イニ}ハ^{イニ}ん^{イニ}ん^{イニ}此^{イニ}教^{イニ}多^{イニ}り^{イニ}一^{イニ}不^{イニ}
律^{イニ}非^{イニ}爲^{イニ}俗^{イニ}家^{イニ}に^{イニ}か^{イニ}ま^{イニ}る^{イニ}者^{イニ}一^{イニ}二^{イニ}る^{イニ}も^{イニ}口^{イニ}に^{イニ}の^{イニ}
惜^{イニ}り^{イニ}得^{イニ}法^{イニ}と^{イニ}吐^{イニ}く^{イニ}心^{イニ}約^{イニ}と^{イニ}む^{イニ}り^{イニ}と^{イニ}慚^{イニ}愧^{イニ}せ^{イニ}
は^{イニ}あ^{イニ}り^{イニ}

宋の范成大^{イニ}桂^{イニ}海^{イニ}靈^{イニ}志^{イニ}に^{イニ}の^{イニ}り^{イニ}し^{イニ}る^{イニ}後^{イニ}
その中に曰^{イニ}蟹^{イニ}海^{イニ}上^{イニ}水^{イニ}居^{イニ}ノ^{イニ}靈^{イニ}也^{イニ}再^{イニ}揖^{イニ}を^{イニ}以^{イニ}て

ア一
ミツキハ
エヒス

家と一海を操り生とるを養ふ水
 汲も縄とつこも腰にまとい入らる
 わきにも縄と動りもさるもと引と上り
 籠納と煮極めく熱しし免水より出さる
 にはとるは死すべしと標さる死をあらひ
 大魚蛟鱈諸の海怪に逃く能くしと死す
 ともりもと毒く記せりも海国海田のあま
 突らるるも一コアとのうも海田のあまけし

等乃嶋ちり舟ぞり免くあまの地とる
 一にそのしゆもさるにあらひりし
 海もこれ一是春れ末のるも海勢海温暖乃
 海あるるあらむと記しれを海世さるくと
 かの海も生業いさる業致にや
 〇一千乃盛と溢といひ兩年りつと掬と云掬四らと
 豆といひ四豆と一區と云四區と云釜といひ釜の二有
 半と藪と云藪の二有半と正と云二年と鐘と云

二鐘と兼と云兼ハ十六斛ともヤル雅孔鮒に作之

見えきり二三四孝の繪に金とあり出せしめと圖し是ハ金全
心はくしと有と金の重のみと知む字候金と心誤

○唐此四維隠り兩同書に家國の治乱ハ文武のみに

ありむし聖人書契をつくり以て隠情を遁し

弓矢を刻ケツカて以て不伏を威し二の者古今此

所存さぬハ文カ以て理を教へ武カの乱と定

むカ云又曰日此明かる幽カに燭カさるるカ是カハ廿五

童雲と以てまじハ光輝カ靚カと莫カ一水の鏡をり

まじりカスカ心カまカあり是に混カるるにカ精カ土カをりて

まじりカ氣象俱に滅カをカし水日の明鑑を以て

常然る者と失カはカい豈カ雲土乃をカと以てその性

とらカまカあカまカ人カ神智カの察カるカ冥カるカ

るにありカ徒内カハカ愛尚カ乃情カと存カも外カよ

多カ憎カ怨カの古又カとカ授カ免カハカ是非カ得失カ惑カハカるカるカあり

とカとカをカみカくカもカとカぬカまカせん

此書の書甲辰暮春此雨定にらゆその

一二を抄く筆をその反古箱の中にも

くまに記す

○あつたは漢字にける法師の辨をあらうと云

柴扉に立てては鉢をもちて食あふをじも其限

るく悦ひ出ぬあつたも多しぬ身も彼ははらうり

と云ふもあつたははらうりたてに心にいりり

いりりもよきぬを喜捨乃本意にしる虚假の

念もつたに心にくにたつたもあつたもつた

おひほりあつたええつらて

○五教のとおしぬあつたもつたもつたにほつた

○此秋 法皇浄土乃法回すこころのりつあつたを

もつたの御製

一念弥陀佛昂滅無量罪といふ心

一はよき心あつたの心もつたはつたの心もつた

そ折つたはつたはつたはつたはつた

足よき心あつたの心もつたの心もつたはつた

きふも凡まある智を御い侍る也
くは〜いぬもれ〜人まそ〜い
一廿女多〜い〜心仏者の智者のありまひ
〜い〜高祖の豊新にも〜い
か〜ん 御所の御親長あま〜わ〜るから
丸妹ら立〜り田舎翁と〜る〜感〜い
○正親町一位家通近湯前ノ格政家懇公此方
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

一位家繪かせすく 竹のよとが〜く描カせ玉ひ〜り
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
子〜る一筆子と〜る〜い〜い〜い〜い〜い〜い
筆〜り玉ひ〜り

從一位前權大納言公通

世に〜り〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

と去^レ旅^ハひ^レと^ハいと^ハ真^ニ世^ニ歩^キ玉^ヒま^ニた^レの^ハ人^ノ乃^ハ心
を^シく^レも^ハあ^レず^レと^ハか^レり^レと^ハせ^レい^レと^ハし^レも
か^レと^ハ作^レり^レと^ハく^レや 京人の文の中に善^ニ惡^ニ
は^レあ^レく^レ己^ノう^レか^レも^ハさ^レさ^レい^レつ^レこ^レら^ハよ^クあ^リ
あ^リ志^ハ水^ノ法^ノ師^ト

世^ノ中^ニは^レな^レる^ハか^レれ^ハ此^ノ年^ノ外^ニは^レと^ハも^ハい^レた^レも
と^ハあ^リう^レし^レな^レい^レ是^ノ年^ノか^レつ^レと^ハか^レら^レん^ハか^レら^レん
し^レて^レも^ハと^ハら^レん^ハら^レな^レる^ハに^ハあ^リう^レん^ハ

あ^レそ^レ終^ルち^ハ多^ク人^ノ顛^倒乃^ハ樂^スも^ハい^レく^レ
乃^ハる^ハう^レわ^レん^ハ歡^樂す^ハい^レま^ハう^レさ^レる^ハよ^クあ^リう^レく^レ哀^ノ傷^ハ
に^ハあ^リう^レむ^ハあ^リと^ハん^ハさ^レつ^レも^ハ此^ノ年^ノの^ハ日^ノ月^ノが^レん^ハぞ^ハ
そ^レう^レさ^レん^ハ者^ハ輕^ク肥^ク流^ル水^ノ則^ハ電^ノ幻^ノ之^ハ歎^ハ忽^ト
起^ル見^ル支^離懸^懸鷄^鷄則^ハ因^ノ果^ノ之^ハ哀^ハ不^レ休^ト野^ノ山^ノ
乃^ハ大^ノ師^ト託^ス事^ノ觀^ノの^ハ言^ハと^ハお^レい^レま^ハい^レ紀^ノ主^ノ禪^ノ師^ト
の^ハ是^ノと^ハい^レ去^レ出^レ誰^ノ最^ノ要^ノの^ハも^ハあ^リと^ハの^ハを^ハあ^リ
り^ハ不^レ見^ル因^ノに^ハつ^レれ^ハ善^ノ惡^ノに^ハあ^リう^レ厭^ハ欣^ハれ^レを^ハよ^ク

とわらう一紙の雪也上人市の飯屋にのまはこ
きまひと一紙の雪也上人の世路に走り又眼あに
伏せし悔とく悔とくは後の世に忘ましきり
市人ぞ見悲しみの涙にまをす是観念の便こと
のほひとくや鳴呼しとくびくをひきき
落月と着一生檻に倚り斜暉を送るとづ
はきし人もあらん一慈鎮和尚乃

町をうらむいせとせとせわれとらうまをれらう

しよとまをいしとそまに託せらぬ家とハおハ
おしゆり

○ 予亦のころ町をめぐり侍りに粘る家、五十
をうらむる胃の痛うかありありふそこに
いつもいしりまにせとせとせと一又まひく
やかんをとりらふにちとせいつくひとありわ。
此のまにに塩也一をまきくまを侍りしとま
とせとせにこつたはえ侍りし九月九日合家

あに〜〜にハ朝夕にふまゝにまゐるものも多
く祈り〜〜していふも後立〜〜も祈りのうちを
う〜ぬもあ〜〜の世の字多く〜〜の
お〜や〜か〜た〜ぬ〜え〜せ〜し〜も〜あ〜し〜人〜の〜は〜い〜
とい〜せ〜ま〜し〜百〜世〜を〜あ〜に〜あ〜る〜家〜と〜り
見〜ん〜の〜福〜身〜あ〜を〜す〜ら〜る〜に〜あ〜あ〜あ
は〜し〜し〜し〜の〜あ〜し〜し〜あ〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜
侍〜し

○わろ人念仏とて変定維生と云ふけとも
変定ともあええといひに快音と
大雄十九
世照卷
曰取天玄大僧正一人来りてか〜し〜侍りし
に此坊い〜〜に〜せ〜は〜七〜と〜変定せ〜
ま〜ら〜ら〜し〜の〜人〜を〜あ〜ら〜し〜し〜と〜あ〜し〜し〜
〜し〜し〜し〜し〜と〜語〜り〜し〜維生に〜し〜し〜
に〜し〜し〜し〜し〜に〜変〜せ〜る〜人〜希〜な〜ら〜る〜人〜を〜し〜し〜
そ〜ら〜し〜し〜老〜は〜し〜し〜と〜省〜ぬ〜し〜し〜人〜わ〜に〜し〜

にまろりー(あま)

○前禅林賜紫炬範浣谿上人今年己亥
くろ老の病ふいふかり文月此末にまのこめ
見えー女子等いふ今ハは隈りこそちうゆる
らん日暮口すさく弦ひーゆまると今ハの際一言
乃辞世にのこー最さまいひにと人お
まひー年一ぬいひ捨ーまはまこそまま
辞せぬも此ハ又何ぞいひたしめいそと

夢裏之蘊如幻之生八十餘歳弥陀一声

そのうたがけまゝあは空仰へのそれたまきうたじ

とよこえま後法陀絶と誦^ズゆるかめく助音世

に西方辰にいり弁量壽仏と誦^スく声こ

ゆる息うー(玉むー) 七月廿四日 甲ノ下刻とるたぐひを

き性生の相あーまや 去年法世のま(東山)を退渡
今ハ泉南塚の十方ちにあま

くどましまいして勸化おありの和家へうま

耳にゆめいこ名あもつれせま門徒のま

中々くうー

紫乃夜のちをそむたのうとそ免をも西の心此端
賜紫乃とた云々うーいふもしーうー海一紫乃の
衣のちもうそ免乃すよとよききもひーい
うー此上まきーまこいえーとかん退渡ーと志を
碓礮にうりまきー此時よこてまきーせー

紫乃衣乃いもけ春ハあはあつてはま深乃袖
上人のうー

九月

免乃おん命と粧うー首ふとぬぬ秋とよまよ
神を月にあつぬちうーしむまのこのうて
たきおー月日とまきーしらとぬたに神さむく何と
あくわんれあつあ

雲ハれとまきーぬの朝のし何とたうて袖のぬん
着おれとまきーいまきーまらーぬもまぬはたふうり
お田まらうーとまきー人の土筆と續うーあつし

ヤミヨリヨリに〜 かつ時に先づ川におもわぬりて
真ま〜 やつらぬ心気は 祇多系人 雨炉のこけ
るつらに〜 こそいづれす〜 ほんのり〜 ほど九月
も〜 ぬらぬら見え〜 ころいさそを〜 しかに 灯のけり
ん他をさる〜 事しは 花はまる〜 花のふけり〜 花の
白まなも〜 事し〜 ぬらと なる〜 事し 情われ秋
くのさるれ 花け〜 なるさ 梅にや 八朔梅東あつて
花のさるいささぬ 梅
乃中のるもの〜 こそわれ 時に先づ〜 こと又さるる

いかにし 木の枝終り〜 こそ又おしくもあはれとさる
母のう〜 橋 ウラミカシとて〜 橋
いと大さやあり 十余年と 歴をその
またにわ〜 事し〜 ことこの〜 事し〜 今年〜 己の
杖繫のるに 情やうに 橋 キツ
ミ こと〜 こと〜 あり
あまの〜 事し〜 事し〜 事し〜 事し〜 事し〜
れ〜 事し〜 事し〜 事し〜 事し〜

とれり 秋の梢にわられ 袖と首に白ふさちをれ
維ノ院乃 信正 退院乃 事し 公府に 啟 ケイ

よし梅を頂 三十七年の擔枷鎖と
脱せん欲しむと書く

幾年のうれぬとふくく入るよりその心を
く守えしうの返しとてしりし

ふもいけり外にほあるはもろも法にあり

此反肥か 平ア目 田圃 タハタ わも八月暴風 ホウフウ

とふわじしと洪水溢き ナウラ 指末 チウマ とくく換毛 カウモウ

乃し一松浦家より啓せしうその他九国の地所

雨のるやう大なることとてしりよのよし梅 コト

は災妖夏災耳や お 梅りしとてしりよのよし

とも守りし お 梅りしとてしりよのよし

わやにくに思ふし お 梅りしとてしりよのよし

量夢經 コニノエニ としりしとてしりよのよし

思ひぬぬ お 梅りしとてしりよのよし

○府下七寺 ナツテラ 古新經の中に金剛頂經觀自在王

如來修行法一卷 青龍寺東塔の系經と云
是處山黒谷の故也

奥の記 お 梅りしとてしりよのよし

三年四月十三日書寫乃言奉之 大中臣安長朝

臣等附の經心

宝永四年甲午三月大濱茶屋乃去罷ありて豆

別大嶋一流一つふさき一も父母の罷かりし

ふふふあししあふ府下 丑条町 乃老 治兵衛 乃女 ハスメ 十二歳

かりしとひて彼老の妻と此一とて近しとるを

一流刑の故実父母是を咄ふり一老と一少

しとも幼老あかけはて一度あり乃老人を親と

そのくせまもさる念乃わじしる不幸の事あり

葉の夜も今いぬれえく竹の蔭にまゝの袖

と草あしひ出たりしあし

幻隠律師予々を和しつるよとぼく

うらふといひも今いふあや途の秋ふれは

○九月十三夜雲をらちわひく月うらふ

あふらほくはの葉いふさざりていと等も絶ぬ月うけ

秋浦乃くまの秋月乃さるいさる初大 風と雅と

よまひしや 十三夜の奇心

くく顔さくらり

暁ノ麻

月あかり 燈の火の糸の如く 暁の麻は 戸

日 性院の上人 美濃國 伊志良 長月 此末ふとやいふ

ほろりしきの秋いづもやあし 甲布うに上人

ふ人もあはれい里の秋いあをさひいさや 侍入れれり

さうそとさう 花とさう 返り糸くも

信阿

たひいれたはははる 暁の麻は 秋の山里

いづく 老夫婦乃く 便かれとさひいさや 侍入れ

うもいかに 暁の麻は 秋の山里

恋しく ぬ月を 送るぬう 此中にも人とあうて

今幸い 二十に ばかり 昔父あうと かけれて

あ子を 暁の麻は 秋の山里

ぬさる づい方 一色川 水く 結し なるまこといふ

に 涙りらに くる月を みるも 今一色 ありふも つか

とあし せうらに くる月を みるも 今一色 ありふも つか

とらにもいふはよきひも見えしその
ふとほくまひせしてこそぬあまはるぬ
百幸のまはりてぬるに尼もかりて後の世
とこそとまひまはせんいづる人に思ふ他の
家とてうほあつたんぬぬれとていふ考を
しやとて享保己とてまの人命あつたに
乃ちあつたまはりてとて三空にいづる其のぬ
より経咒ととめとてあまのまに彼男教完

とあつとて國守ゆりゆりしそゆふれとて
三空にいづる経去社老とて目とて男もその志を
悉く父母の内に透ひしる夢のぬるに
是く女の貞節乃ら末とけぬるまはりてほれせ
ぬ涙ぬりてとてあまのまはりてとて
世乃一幸とてその里に人暮り語つてとて
とぬ里のあつとてはととぬるぬかひの貞女ハ
高にも表しゆんを末乃母とてとて術談とれと

下り行々にやれし近世大夫士乃家より農南の
東へ近女乃のふもしく真正の乃いおひいしげ
なり世の学も若し鼻のふとおこめたりるらん
大方公利ふくく不存不義れおまひ多うらに
やめしハ家のさら備^{フシラ}きく彼もまもり
たりもふこくゆるりくしゆは仏の利を
としく嘲り諷くおのまに因果撥無乃外
乃とありなりし聖申此聖の妙法とそふり

口業^{コゴウ}乃罪と、ゆるしぬ者なりくどき
れる今も乃ゆるしと虚ろくといく真節の
誠わりく三空にいのんに千證なる一にまけ
く是を信とす必池^チりて冥罪とま孫く
るふかりれ

○智鋒僧正退院のゆ上にもとく
せ給ひ捨世のゆきとく一室にひま
法^{ホウ}はじ定のきれめとらふとやうはしつぬにぞ

いまにこの世にきこひたつての街に
生 死
六道
流落

さきさきとてわづらひしうらなれ
幾許
清淨

まればともねしうらなれ
独歌

くまのふりかへる宿よ
スレトシ
モノナリカシ

しづかにくむにぬるるは
静
甲斐ナシ
先恕
罪人

さきさきとてわづらひしうらなれ
鈍

をねまじりて徳をよむ
鈍
昔昔

いづれに玉ひらりと糸さし
鈍

無上功德乃んぞ

法の庭ちむね葉のよの葉

叶に折るの錦とて

葉の世にほろりて
今生
而月

まほはらきこひにけり
モノナリカシ

水舟の里にふりて

水のきこはるる

跡と見ぬ才とよさくれのち
而月

神子月乃すし 白草園信阿

そのくみ されは 太神宮へ 奉りしる

たもとをいおけうて 書きまはしめたる

志きまよきとをを別め 賜にあられて 出袖は 月夜

高師くろくろく 女さくら ちりり

白草園信阿乃 信とより 三子 月夜

詠しとく ぬきつり ぬきつり ぬきつり

難波の ぬきつり ぬきつり ぬきつり

ゆつ 福とん のき乃 かく ぬきつり ぬきつり

あゆみ ぬきつり ぬきつり ぬきつり

しん ぬきつり ぬきつり ぬきつり

その ぬきつり ぬきつり ぬきつり

眼とげ ぬきつり ぬきつり ぬきつり

来門雲鶴

う ぬきつり ぬきつり ぬきつり

戲 寄 白草園主 羽

秋 六 如

遊儒林矣通神道窮理歸心入叔門

唯易途殊知摶徑自矜人世白華園

和ス芳韻ヲ

信阿

江南雪裏梅花信風月掃來名利門

塵世但兵寒批淨何時去入白鷗園

○乙巳ノ冬ノ夜

梅先南至白晴軒竹隔西斜暗頽垣

候曉宵長鐘半夜漆束萃髮豆糜温

仲冬十有七夕至適遇彌陀降誕日仍

唱ス一絶ヲ

仁勝慈尊降誕辰一陽今日復ス金輪ヲ

天根轉處十方界將作無量壽下城民ヲ

同日香偈

照破ス人天夢白毫曉色用

寒紅花不尺量香雲甚臺

○信ハ懃ハ實ハ不レ疑ハ不差ハ爽ハ

ニシヤリトコトニカタシ

アチコトノカワヌシ

水府常福 真阿上人三部經の合讚七卷

を述し一の年七月板成すかこるるるる

にさるる経解多しといふも壽経觀小

別した述すく三部一平乃説ふりり

らまけまび降か録流發義正意乃の註者

末蓮社の至宝といふる一の今口其の合讚

。清板白骨觀の圖あり 説に字して掲く

位山宝の林をりるるにさるる身と何新むん

○ 37 神音

法皇修学の離宮に

御幸詩款此の真をまゝに記す

あつと記

山皆紅葉

紅ノ字ヲ用テ

御製

秋後重来言洞中

台岑西脚野林東

満山一様霜楓樹

蜀錦十梭織得紅

。 穀子取ぬるの櫛さのさくおまそ山さかへて原

法皇此の御も作りしもの也

正親町一位家

教...と...に...を...と...の...の...の...

○己十一月四日 法皇 禁裏、御幸御施

左方 参音色 慶雲示

万岁示 近富 近仕 近富 高房 近細

散手 近仕 高房 高忠

喜春示 近富 高房 高忠

央宮示 近富 近仕 高忠 近富 近義

陵王 高房 長慶子 高忠

右方 参音色 慶雲示

長保示 兼陳 林九京亮 廣経

貴徳 林肥前守 廣雄

東儀大進將監 兼村

白濱

兼陳

東儀右衛尉

兼雄

廣經

多

久連

新鞋鞞

忠音

兼雄

兼村

久連

納曾利

廣雄

廣經

退出

長慶子

武具や隠し朝鮮へ渡り城、松花お此品く

たの

一 花色綴貝足

七十領

一 卯花綴貝足

八十領

一 黒草綴貝足

百五十領

一 薄萌黄綴貝足

二百領

一 合ラ五百領

一 銀節立甲

八十四列

一 惣銀薄ノ甲 百劔 但三つ星

一 刀脇指 三百五十腰

一 長刀 八十振

一 鉄炮 二十二挺

一 武具の布 八十疋

一 味噌 七百斤

一 海荒 三百斤

一 塩麩 四十樽

一 鯨節 七百連

此外食物はおぬの品程有

一 十六端帆 一ツ

一 帆柱 一本

一 筵 五百枚

以外：帆おくみ

大乗社の老人の名義 国所

とくくたに記さし

紀伊國平戸、去三人

惣之清

九右衛門

又右衛門

九右衛門

三右衛門

同國甲山、去一人

筑前國星野、去三人

三右衛門

権之清

清之清

右ノ合之波ノ去

孫七郎

利八郎

筑前國四ツ山、去二人

吉波國、去二人

大ノ者ノ白状ノ覚

一當己三月十四日壹波國ノリ對言國ノ海

豊浦沖ノク係に東ノ方ニあり二十七八里

沖へ舟出とて是れより救日とてくくく如き波
一 此頃内乃糺是是は是附早速と波一は
進波一五月之百幸波は奉りわより番
のり舟出とて是れ長波は奉りわより番
長波 幸波より波人舟多く幸り
織あく内政分の者九人 幸え波一は
者三人 百捕し 長波く幸り 幸り 幸り
作舟舟の舟は政は味あくくくくくく

くくくに波一はくくくは度三度目の海
のむ糸白状波一はくくく是にくくくたの者
乃圓くくく波一は儉養くくくくくくく
大坂より舟出とて是れは波一はくくくくく
波のくくくは波一

己八月

け一浪人の波にありくくくくくくく
に波一はありくくくくくくくくくくく
傳

漢古方万にびくもに命をきて家紙

而強はもきくひ跡しつるに 戦國の武人皆利欲の
をうめはれあす通

わん人云、凡そ後海のこよりわんを長修乃

ちげの朝鮮人參の私販等止むつるはや

りふも利をてんく身とをり人ふふはあふく

あつた立揚乃利に命を喪へ恨とのことを去

返せ多し はころもあつた黨乃高家自はくし
亦い教を破る者そ殺一二はくし 兼殺

わんうれういづくの危乃 イリハニ
アキナ 傾るひるに

さあまハ又刀劔乃わんをて女傷れ害るも

をくも酒強れ立るんをて碎弘乃去るてや

をわん女乃わん國をてこり嫁穢れ奸を

をれ城室乃わん中益人を由つれや出ま乃

仕一わんをて納俗乃物物をしつれやうはし

を人元身乃わん男いづく妾念をてゆ

をれ儒教も仏説も立つてまひ己ら惑を

止つて是を怪あつ人子方の中いづくもあ

尾のつらさごとくわたりしよりきつたあつ海へ一箇の
欲念は起りて志すも安れひ海なり

屏營アセキ愁苦ウキキコト 累ルイ念トヤセニカクセドクヨクヲモフ積慮ヤクモ乃ノ先サキに走

復フタヘせしむるあひ水火益威ウツケ 怨ウラミ家ケ債サイ主ヌシ乃ノ先サキ

焚ヒヤリ漂ヒヤリ却ヒヤリ棄ヒヤリせしむるれもさも憂ウ毒ドク川カハ

とすし憤ウレとむらひ怖コソウ懼ウレと懐ウレは心ココロに終ハジマ

天命ヨウメイはらるる毎ツネニ日にこれ毎ツネニに傳ツタへゆふめさうい

らもしも又憂ウ懼ウレ万端マンバンにニ草カキ苦ク止トまるるマ

乃ノししむるるるを總ソウとしし今イマ痛イタとなす

世ヨふシちるるも豈ナニ大オホ慙ニクシ大オホ愧ハズカシせらるる人ヒトや

○ 雪ユキはふりるるるるしあつさふいづら

うにうれあつしと涙ナミダもあつるるにいとありさ

にさひさつらまほしうらにねのさつあつあつげ

小ゆりはえら山ヤマ里サトれら地チしとあつあつれら

とし書カキか未ミ摘ツク花ハナ今イマ新アタラシ乃ノあつあつあつあつ

見るもたう又橋ハシのまうつれらとほは返カエ

くらしりせむふうせううわんねのよめあは
と起ううううううううううううううううう
こんゆらなと 古歌 我神は名ふ立まのねら
空一う岐のこね目そるに ちるせ
あのおろきあまといひらにうううううう
いと面志海たあーれとるうううう 筆せしを
妙しあまうううううううううううううう
春みうはううううううううううううう
くううう ヒカニ 東乃書うううううううううううう

席乃うううううううううううううううう
かうううううううううううううううう
けうううううううううううううううう
はる乃囁のまううううううううううう
うううううううううううううううう
やうううううううううううううううう
葉とらううう

井とらうううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう

いづはるるまゝとあはれんらん一サ故に
ぬれころんぞとさこそあやみにんらん
そとまゝなり

一里、時雨 十月廿日會

神言いし夜を此里あれて漏るぬも神ぞ引
尊珠院の大師請神夜の懺^せ法にまゐり
吾人^{ニウライ}の時つらに自ら報慶をさしひ得ぬ
心地をまゝ安楽の品の般^{はん}舟^{しゆ}助言せし

源入禪定見十方仏と誦せしとさうし

三四代いさな布州宮様とてはたすたえおと見え

二十四日乃囀自さうしと神言まゐり

とさうしはらもあはれんぬあといふに

たしはと免く六如師一むらうし使に

道につく事もなかりてめつとさうしははれ神言

女乃重^{ちゆう}文とさうし

あはれよ日教けしは神言よは建あれおは村人

政を志ししもの凡庸乃忘るるを紀よ
まわく真れたる礼を此れしむるも亦く
正といし一鄙一り取をよ泥工泥工はスア洗足には
あふれしやいしとて連し傳はしこもさうとわれ
家のわつしもふを此人の田舎の俗に習
ひかゝひのさぬあつ言察ある一を讀ましけれ
ミヤキ上日宿ヒト宿をとりあつ人乃定ま事しる附ありて
出づる日報をいし事し難と脱を苦辛師

と今もあをなれた神も定高相風村のあつた
あつたといふものかりにこそ己戸を出しし
復く傳し此の何の爲に御カイトウ取乃をさか
くそを河原にたると人と事なりしをれ
噫毒楮香りくさるるにあらむ
紅炉やうらみ温粥を喫しきつらに
と占得し蕭シヤウ滅をさし柴扉乃閉れん
ん尾ましう寸とくしりる定年元々

とくく人乃笑少不従くを不周多方
鮮朝カイテリと作トを夢ト

梅花三五黙シ 晴雪殘星清シ

誰識蝶身夢シ 炉辺百念輕シ

○仲冬十日京師時多ク 風雷シ 戸ノ 身ヲ ぢル

一ノ 心ヲ 白ク 日ノ 影ヲ 在家教十戸ノ ぢル

帝ノ 有ル 心ヲ 一ノ 心ヲ 京人ノ 文ヲ 記ス 河ノ 留ル 信ノ

おそ事ハ 六ノ 炎ハ 甚ク ぬの折ニ こそわきハ 火ノ 算ハ おなりシ

陰ノ 乃ニ 志ハ 多ク 記ス 時ハ ありシ 一ノ 心ヲ ぢル

心ノ 乃ニ 志ハ 多ク 記ス 時ハ ありシ 一ノ 心ヲ ぢル

にあやぶク 多ク 事ハ 此ニ 時ハ ありシ 一ノ 心ヲ ぢル

迅速ニ 行ク 一ノ 心ヲ ぢル

あるニ 此ニ 志ハ 多ク 記ス 時ハ ありシ 一ノ 心ヲ ぢル

かハ 暫キ 懸セ せル 心ヲ ぢル

○小君光雲院 清一 百ノ 日ノ めカ とシ 心ヲ ぢル

後ノ 師ノ 心ヲ ぢル

一、何れに於て此日とちりくすいふえーにあれ
如房

別進の旅の愛もせしむる事なき事と云

十二月十八日 吳牌 徳貞山に在りたまひと

近丸の法會ありしりもしりありありと

